

香葉会解散記念礼拝 2月18日 於室の木チャペル 「見えないものに目を注ぐ」

コリントの信徒への手紙一 3:11 イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。

コリントの信徒への手紙二 4:18 わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

昨年末で、関東学院女子短期大学の同窓会である香葉会が解散となったことをお伺いしました。この香葉会の解散を覚えて、このように神に礼拝を捧げることができますことを、心から感謝いたしたいと思います。

さて、公立の学校と私立の学校とで何が違うかと聞かれたら、皆さんはすぐに何を思い浮かべるでしょうか。

いくつかのことがあると思いますが、少なからずの人がまず思い浮かべることは、少々俗っぽいことですが、学費の額が著しく異なるということかもしれません。また、私立は、公立に比べ、各学校や法人が特色のある教育を行っているという点が挙げられると思います。

しかし今私が、この問いによって言いたいことは、「建学の精神」があるか無いかということです。あるいは「建学の精神」をより具体的に表わす「校訓」があるか無いか、ということです。もちろんこれらは、私立にはあって、一般に公立には無いものです。

関東学院女子短期大学の場合には、もちろん学校法人（あるいは財団法人）関東学院の中の一つの学校でしたから、建学の精神はキリスト教の精神、校訓は「人になれ 奉仕せよ」となります。それらに基づく教育がなされていたということです。

ただ、女子短大の場合、例えば当時の大学等に比べるとかなり濃厚に、建学の精神に基づく教育が行われていたと言ってよいのではないかと思います。

高校までは公立の学校で学び、関東学院女子短大に入学された方は、キリスト教教育の密度の濃さに少なくとも最初は、戸惑いを覚えた人も少なくなかったのではないかと思います。

まず、キリスト教の礼拝形式に基づく入学式で始まり、まもなくして、時代にもよりますが、

主に天城山荘でのリトリートがあったと思います。また毎週の礼拝もあり、また2年生の時もリトリートがあったと聞きます。当初修養会と呼んでいた時期もあったと聞きます。

入学して間もなく中伊豆の山奥にある基督教の施設に連れて行かれるというのは、何か洗脳でもされるのではないかと、当時一抹の不安を覚えた人も、もしかしたらいたかもしれません（オウム真理教が問題になった時代、第○サティアンという言葉をよく聞いていた頃は、特にそうだったかもしれません）。

しかし、そこでは単に基督教のお話を聴くだけではなく、学校や学生生活について深く学ぶことができたり、そこで親睦が深まり、生涯の友ができたという人も少なくないかもしれません。二年生の時は、本等のテキストをあらかじめ読んできてリトリートを行うということであったと聞きます。自分の専門の勉強以外のところで、自分の生き方、在り方、また生きることの意味等について、基督教を媒介として深く考えさせられる時ではなかったかと思います。

当時は若くて、なぜそこまでしてやるのか分からなかったという場合でも、思い出してみると、チャペルがある施設で神に祈り、リトリートを行うということは、部活の合宿や修学旅行等とは一種異なる雰囲気があったのではないかと思います。そういうところに短大独自のカレッジカラーがあったのだらうと思います。

単に建学の精神は基督教ですとだけ言ってしまうと、単純に聞こえますが、それを土台にして、深く物事を考える基礎が培われたのではないかと思います。これは、短大は、文学であれ栄養学であれ家政学であれあるいは幼児教育学であれ、単に専門の学問を学ぶのとは異なる人間教育をととても大切にしたいということだと思えます。これは歴代の短期大学長及び短大教職員のご尽力の賜物ではなかったかと思えます。

このことは、本日の解散記念のプログラムにも通じるところがありますが、単に記念のパイプオルガンコンサートを行いましょ、グリークラブの演奏会をいたしましょ、というのではなく、礼拝をもって神の前に感謝を捧げることが大切なことと考える発想は、まさに建学の精神に基づくものであると思えます。

少し話が変わりますが、幕末に日本が開国してから、たくさんの外国人宣教師が日本にやって来たことが発端となり、多くの私塾が生まれました。またそれをもとに、基督教主義の私立学校が生まれました。また欧米から帰国した日本人が、自ら私学を創設した例もあり

ます。

その流れで、それまで等閑視されていた女子教育や幼児教育等が始まっていったわけです。

特に女子教育においては、日本の伝統的な良妻賢母型の女子教育ではなく、女性を一個の人格と見なし、男性と同じように「知的教育」（知識・知性を豊かにする教育）を施す、という視点がキリスト教によってもたらされました。ただし、女子の教育の場合には、「知的教育」でありながらも、特に男性には無い女性としての特性を生かした教育という面もあります。関東学院女子短大はこの系譜に近いと言えると思います。

明治5年（1872年）には、最初の近代的な学校の制度である学制が敷かれ、公立の学校が多数創設され、当時は、社会が変わったばかりですから、いろいろ不備もありましたが、近代国家としての学校が、私立であれ公立であれ、少しずつ整っていきます。

ただ、最初に申しましたように、公立の場合、建学の精神に相当するものがありませんから、日本の近代化が推し進められる中で、末は博士か大臣か、といった言葉が象徴するように、立身出世のために教育を受ける、あるいは、天皇中心の国体が整ってくると、儒教的な徳目に則って、天皇の臣民、家来を作るための教育に終始していくようになります。

その点、私立学校は、必ずしもキリスト教主義でなくとも、建学の精神がありますから、単に国家の施策（しさく）に迎合する人材を育成する、立身出世のために勉強を一生懸命にすることを美德とする、というように単純に流されることなく、人間を育てる、人間の心を育むということを大切にしました。キリスト教学校は特に、愛の心を育てる、奉仕の心を育てる、平和への思いを育てる、そういったことを大切なこととしたのです。

これについては、基本戦後も同じです。とかく偏差値や業績、実績だけで人間の価値がはかれるような社会で、＝そのみを至上の価値として生きるような風潮があるなかで、キリスト教学校、そしてとりわけ関東学院女子短大は、単に学問を学ぶだけでなく、まさに人の生き方・在り方について、深く洞察する教育がなされ、その教育を受けた方々が香葉会に所属し、活動されてきたと言えます。

確かに短大という組織は約20年前になくなり、香葉会も昨年末で解散となりました。もう一つ言えば、皆さんの中の多くの人にとって思い出深い天城山荘も、コロナの影響もあり、一昨年休業し昨年売却されました。幸いキリスト教の施設としては残りましたが、宿泊施設としては無くなりました。学校とか同窓会というものは、単純に物質的なものではありませんが、ある意味かたちのあるものです。天城山荘もそうです。それが、時代の流れの中で途

絶えてしまうことは、とても悲しいことですが、ある意味やむを得ないことかもしれません。しかしそこで育（はぐく）まれたものは、いつまでも残る、いつまでも続くと言うことができるでしょう。

このことについては、3つのことが言えると思いますが、1つは皆さんお一人おひとりの心の中に残り皆さんの生き方を支えていく、と言えましょう。キリスト教は輪廻転生ではなく、天の御国を考えますので、皆さんとともに、そこにまで至ると言えましょう。

一つは、皆さんがいろいろなかたちで、人たちに伝えることでそれは継承されていく、と言えましょう。

そしてもう一つは、短大は人間環境学部となり、またそれは3つの学部に分かれましたが、やはりキリスト教の教えに基づく教育は続けられ、そのようにしていつまでも継承されていく、ということです。ただこの点については、やはり短大のときが一番密度が濃かったと言えるのかもしれません。

教職員の方は通常学生よりも長く短大で勤務されたことと思いますが、学生だった皆さんは一般に在籍期間は2年間です。短いといえば、短いですが、考えてみれば、かつて、イエスの活動期間は1年とも3年とも言われています（長くて3年です）。これも非常に短い期間です。その短い期間にイエスは弟子たちとイスラエルの地で活動しました。

イスカリオテのユダの裏切りもあって、イエスが十字架に架かった時には、弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げてしまいました。

イエスが本当に復活して昇天したかということは、さておき、イエスが人間存在としてこの世からいなくなった後で、時間と空間を超えて、キリスト教は世界に広がっていきました。

再結集した弟子たちは、イエスの愛と奉仕の教えを引き継ぎ、地中海世界へと活動の場を広げ、そして最初の弟子たちが亡くなっても、イエスの教えは継承され、二千年経った今もそれは人を生かし、世界を変えて来ました。

つまり、たかだか3年程の間、見えるかたちで存在したイエスやその弟子団がなくなっても、人は変わり時は移り、場所は変わっても、その教えはずっと続いてきた、ということです。

それと同様に、関東学院女子短大やその同窓会が、見えるかたちのものとして消失しても、

そこで行われたイエスの教えに基づく人間教育というものは、それに触れた人の人生を豊かにし、人が変わり時は移れども、いつまでも続いていく、ということです。

最後に、関東学院女子短大の前身である関東学院女子専門学校第一期生募集の「入学者心得」に記されている学校の教育目的に言及して終わりにしたいと思います。これは終戦の翌年 1946 年、昭和 21 年に出されたものです。

これは、一昨年亡くなられ、昨年偲ぶ会を行った故林淳三元短大学長がちょうど 10 年前（2013 年）に上梓された『関東学院の女子教育：女子短大の存在と私』という本の中に記されています。

おそらくその最初の学生募集の「入学者心得」を起草したのは、関東学院において女子教育導入を推し進め、後の短大学長になった相川高秋先生であったと思います。

それを引用した林先生の言葉から始めたいと思います。

第二次大戦直後のわが国女子教育は、良妻賢母的な考え方が支配していたが、相川高秋先生は戦後いち早く社会的に進出する女性の育成を目標とされたのである。女子専門学校第一期募集の、1946 年の「入学志願者心得」には、学校の教育目的が次のように書かれていた。

5 項目あるので読みますと、

1. 欧米に範をとる、明るく自由な教育
2. キリスト教精神に基づく、崇高にして真摯な学風
3. 外国人教師に指導せらるる実用的な語学教育
4. 象牙の塔を出でたる生活としての授業経験等
5. 公開講座を持つ本邦最初の婦人市民大学、卒業後も終生勉学の伴侶

これを紹介された後、林先生は言われます。「これを見る限り、当時としては時代に即応した斬新な女子教育を目指したものと思われる。これはキリスト教信仰に基づく建学の精神がもたらしたものであろう。」

入学年度は異なるにせよ、皆さんは上の 5 項目をどこまで実感されたでしょうか。もちろん時代の流れとともに付加されたことや変更のあったものもあったかもしれませんが、これらは基本了解され得るものであると思います。そしてその根底にあるのが建学の精神であ

るキリスト教の精神ということです。

当初、女子専門学校の流れを引いた女子短大は、女子としての四大（四年生大学）になることなく、2002年、大学に吸収され、その2年後に完全に廃止され、香葉会もなくなりました。

しかし、人が変わり学校の形態が変わっても、その中に流れるキリスト教の精神に基づく教育がこれからも続き、人を生かし続けて行くことを私たちは喜びたいと思います。そして何よりも、女子短大の時に一番密度の濃いかたちそれに接することで豊かな学生生活を送ることができたことを、心から感謝すべきこととして私たちは思い起こしたいと思います。

皆さんは、目をつぶれば、自分が在籍していた頃のかつての短大のキャンパスや校舎、そして恩師との交わり、友との交わり、短大での様々な経験をありあり、まざまざと思い起こすことができることと思います。改札が下にあった頃の金沢八景の駅前も思い出されるかもしれません。この関東学院女子短大で、恩師にも恵まれいかにすばらしい教育を受けたかも思い起こすことができるでしょう。

それと共にその根底に流れるキリスト教の精神とその教育は、短大がなくなっても香葉会が解散しても、これからもいつまでも絶えることなく続いていくことを心に留め、この礼拝において、神に栄光を帰するものでありたいと思います。

―――

お祈りします。

アルファでありオメガである主なる御神様、あなたは、初めであり終わりである方です。この世界の基を据えられ、そしていつかこの世に終わりの時をもたらされます。また、歴史を導かれる方として、御心によってその時々、あるものを生じせしめ、そしてまたそれを取ら去られます。そこには人間には計り知れないあなたの深い御心があるものと信じます。それは短大しかり香葉会しかりです。かたちあるものが無くなることは多くの場合悲しく寂しいことです。しかし、そこに集わしめられた人たちをあなたの深い愛と恵みで養い育てくださったことを心より感謝いたします。そしてそれが継承されていくことを心から喜ぶものとあらせてください。

今日のこの香葉会解散礼拝のために、様々なかたちでご尽力、ご準備くださった方々、またご奉仕くださった方、くださっている方々の業（わざ）を豊かに祝し顧みてください。これからのプログラムもあなたの御心のうちに深く留めてくださるようお願いいたします。この感謝と願い、主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げいたします。アーメン。